集合的に構築された楽譜・画像関連づけデータベースを用いたピアノ演奏表情構築支援の試み

楊　旭[†]　　小林　智也[†]　　小倉　加奈代[†]　　西本　一志[†]

楽譜には，テンポや音の強さなどを表示する楽譜記号が記載されている．これらの情報は演奏表情構築の一助となるが，詳細かつ具体的な楽曲解釈を行うための情報としては全く不足している．本研究では，曲の内容や，その中にある感情，また作曲者の意図などの，楽譜に記載されていない情報を，初学の独習者にとって適切な形態（画像）で提示することで，楽曲の内容に対する理解を深め，音楽的な演奏表情の実現を目指す．最終的に被験者評価実験により演奏表情の構築へ及ぼす影響を検討する．

Supporting Creation of Expressive Piano Performances by Using A Collectively Constructed Database of Images Linked with Musical Scores

XU YANG[†]　TOMOYA KOBAYASHI[†]　KANAYO OGURA[†]　KAZUSHI NISHIMOTO[†]

The musical characters that display tempo, dynamics and so on are indicated on a score of a tune to help creation of musical expression of the tune. However, these pieces of information are not enough for interpretation of the tune. In this paper, we show various images that represent various information not indicated in the score, such as contents of the tune, intention of its composer, and feelings in the tune, to the people who are self-teaching the piano so that let them deeply understand the tune and create their own expressive musical performances. We conducted user studies to evaluate influences of the images in creating the expressive piano performances.

1. はじめに

音楽の演奏は，楽譜に記載されたとおりの音列をただ正確に再現すればよいというものではない．演奏する楽譜を，その楽曲にまつわる様々な周辺情報を考慮しながら深く読み取って解釈し，その解釈に基づくとともに，さらに演奏者自身の感性や演奏する場の雰囲気などを反映させながら，個々の音や音の並びに対して音量やテンポの変化などを与えることによって，その楽曲を表現するのに適した演奏表情を付与して聞き手に伝えることが重要である[1]．特にクラシックのような再現演奏の場合，旋律や和声を変更したり創作したりすることは一切許されないので，演奏者の創造性は演奏表情としてしか発見のしようがない．このため，演奏表情を構築して演奏に反映することは，演奏者にとってもっとも本質的な行為であるといえる．

しかしながら，初心者にとって，演奏表情構築を一から行うことは容易ではない．多くの場合，楽譜にはテンポや音の強さなどを指定する楽譜記号が記載されている．これらの情報は演奏表情構築の一助となるが，詳細かつ具体的な楽曲解釈を行うための情報としては全く不足している．音楽教室などでは，指導者が必要に応じて必要な情報を学習者に提供することによって，学習者の楽曲解釈と演奏表情構築を支援している．しかし，独習者の場合はこのような支援を受けられない．このため，音楽演奏を始めたばかりの独習者は，演奏表情構築に必要な情報を十分に得られないままに練習を進めるため，無味乾燥でつまらない演奏になったり，一応演奏表情は付与されているものの，誤った奇妙な演奏表情をもった演奏になったりする結果となることが多い．曲の内容や，その中にある感情，また作曲者の意図などの，楽譜に記載されていない情報を，初学の独習者にとって適切な形態で提示する必要があると考えられる．

本研究では，そのような情報を画像情報として提供する手段をとる．画像を用いるのは，音楽と映像や画像との連動が，それらを単体で視聴するよりも，ユーザに豊かな音楽視聴体験を提供することができる[3]ことが示されているためである．また，画像データベースの構築には，集合的手法をとる．インターネット

† 北陸先端科学技術大学院大学
Japan Advanced Institute of Science and Technology

を利用して，ピアノ教師や学習者，音楽愛好家など幅広い層から，楽曲の内容や作曲された時代背景などを表現できる画像を収集する．これにより，一人だけで画像データベースを構築する場合に生じがちな偏りを回避して多様性を確保するとともに，集合知的な効果によって誤った画像情報が支配的になってしまうことを防ぐ．こうして得られた画像を楽譜に付加して提示することにより，初学の独習者の演奏表情構築を支援する．

2. 関連研究

現在，音楽演奏表情の構築に関する研究[1] [2] [3]が多く行われている．竹内は，楽曲の内容を全く考えずに勝手に演奏したり，人の真似をしたりするのではなく，作曲者の気持ちや，楽曲を通して表現したかったことに近づき，その上に自分の考えを加えて演奏することで，上手い演奏表情を実現できると主張している[1]．坂本の研究では，演奏とは楽譜通りに弾くことだと考えている学生が多いという問題を解決するため，演奏表現することの意味を理解させることの重要性を検討している[2]．田畑は，音楽表現の意義と方法，原理に教育学や心理学的根拠から音楽教育への好ましい適用法を示している[3].

また，音楽と画像の連動と相互作用に関する研究としては，[4] [5]がある．石先らの歌詞情報に基づくWEB 画像検索を利用した楽曲連動スライドショー生成システムの研究では，楽曲歌詞の内容に適した画像を楽曲と同期させて再生することで，楽曲が表現する情景表現を向上させ，より印象深い音楽体験の実現を支援している[4]．岩宮の研究では，ヴィジュアル・メディアによる音楽聴取行動するときのオーディオ・視覚と聴覚に共通した性質を通して，聴覚の印象と視覚の印象を相互強調する共鳴現象が認められた[5]．

3. 提案手法

本研究の概要を図 1 に示す．本研究では楽曲の内容や，その中にある感情，また作曲者の意図などを画像で表現することで，独力で楽曲を上手く解釈できない初心者の演奏表情構築を支援し，その演奏表情の構築に及ぼす影響を検討する．

まず，インターネットを利用して多くの人々から楽曲と関連づけた形で画像を収集し，楽曲と関連づけられた画像データベースを作成する．独習者は，楽曲・画像関連づけデータベースに蓄積された，楽曲の各部分に関連づけられた画像群の中から，適宜好ましい画像を選択する．こうして得られた画像付き楽譜を見ながら演奏し，楽曲を練習する．

3.1 画像データベースの構築

楽曲と関連づけられた画像データベースを構築する手法として，画像検索を使用する手法が考えられる．たとえば石先ら[1]は，歌詞付きの楽曲と関連する画像を取得するために，歌詞から生成した検索キーによ

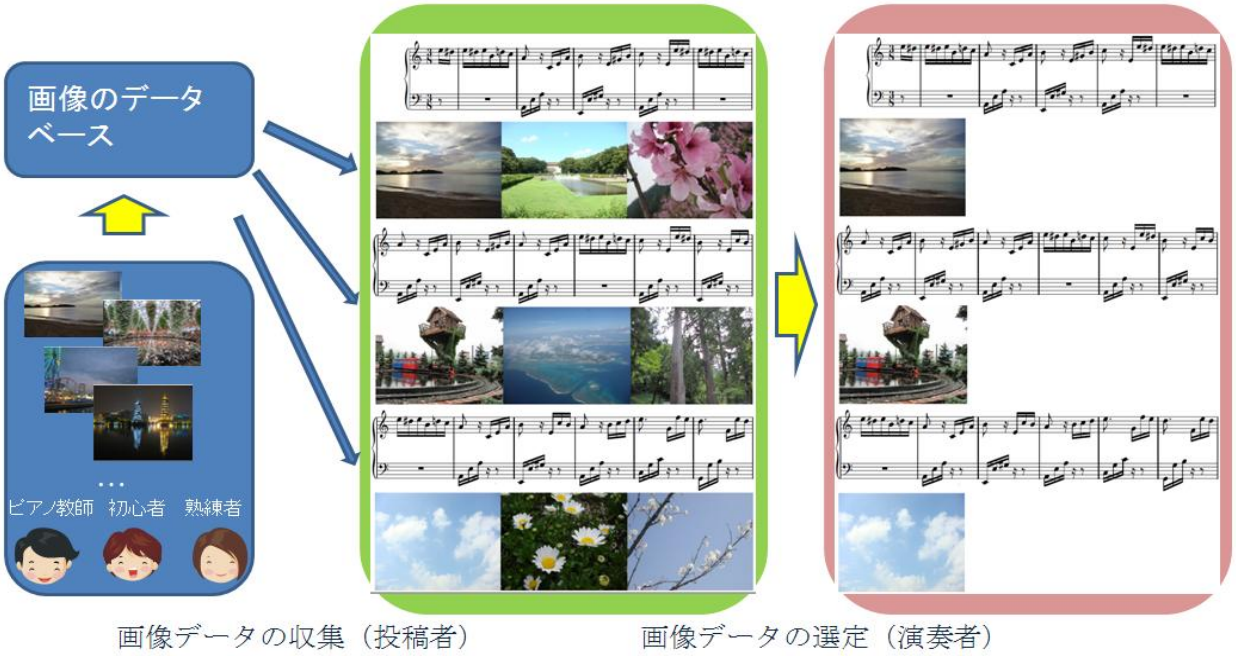

図 1　本研究の概要

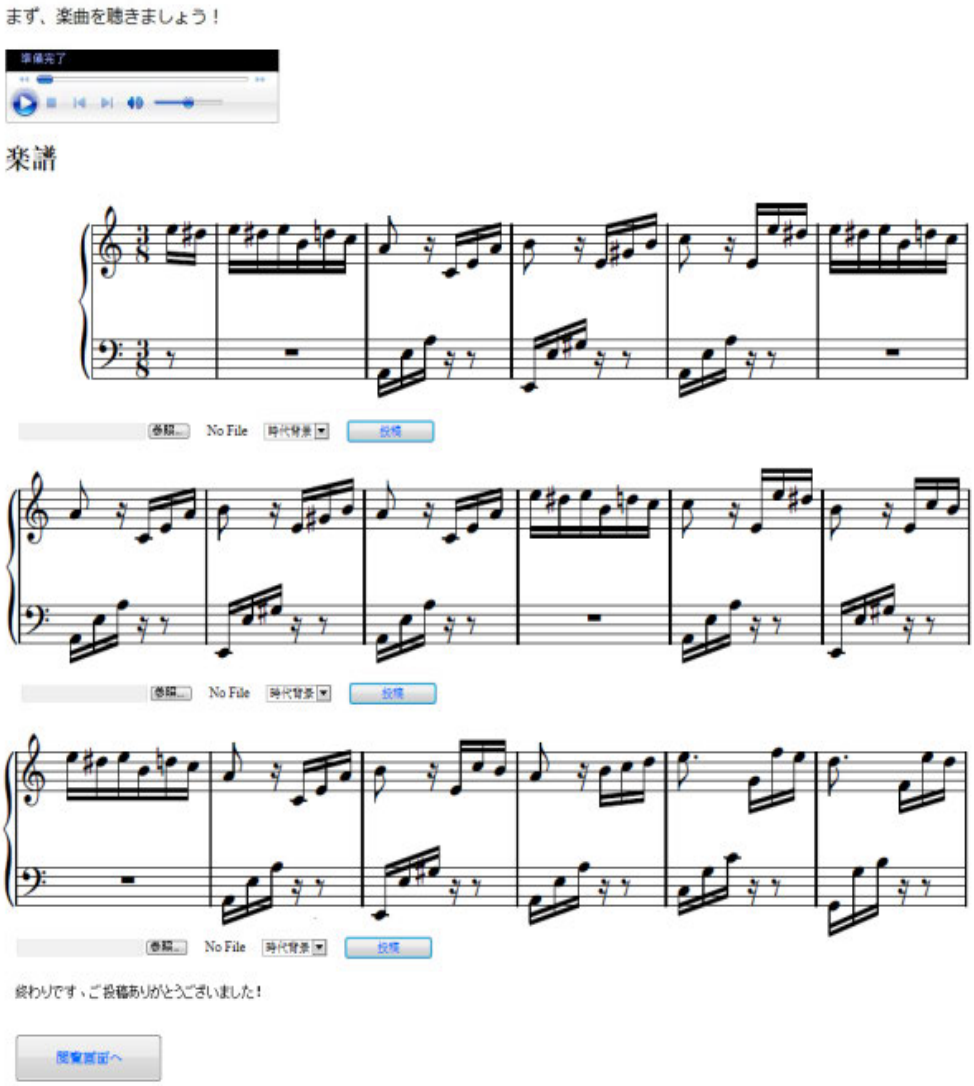

図 2　画像収集画面のイメージ

って画像検索を行っている．しかしながら，本研究で対象としているピアノ曲には一般に歌詞が付与されていないため，このような手段を取ることはできない．そこでクラシック音楽の研究者等による楽曲の解説文を使用することを試みたが，検索で得られる画像の大半が，当該楽曲の演奏を含む CD ジャケットなどの，あまり有用ではない画像となってしまうことと，楽曲内のより細かい部分と関連づけられた画像の検索が困難であるという問題があることがわかった．このため本研究では，インターネットを利用して，多数の人々による人力で画像を収集する手段を採ることにした．このような集合的手法をとることにより，一人だけで画像データベースを構築する場合に生じがちな偏りを回避して多様性を確保する効果や，集合知的な作用によって誤った画像情報が支配的になってしまうことを防ぐ効果を期待できる．

画像を収集するために，専用 Web サイトを作成した。当サイトの画面イメージを図 2 に示す．画面には，楽譜が表示されている．楽曲を聴きたい場合は，Web サイトに載せたプレーヤーにある「再生」ボタンを押すと，MIDI データで当該楽曲が再生される．楽譜には，一段毎にその箇所に対応する画像を投稿するためのボタンが用意されている．画像を投稿する際には，併せて投稿者のプロフィール情報と，「楽曲内容」あるいは「時代背景」のいずれかのタグを付与する．これらの情報は，ピアノ独習者が画像を選択する際の参考情報として使用される．

3.2　画像の選定・提示

ピアノ独習者が練習したい楽譜を開くと，各段に関連づけられている画像群が図 3 のように表示される．

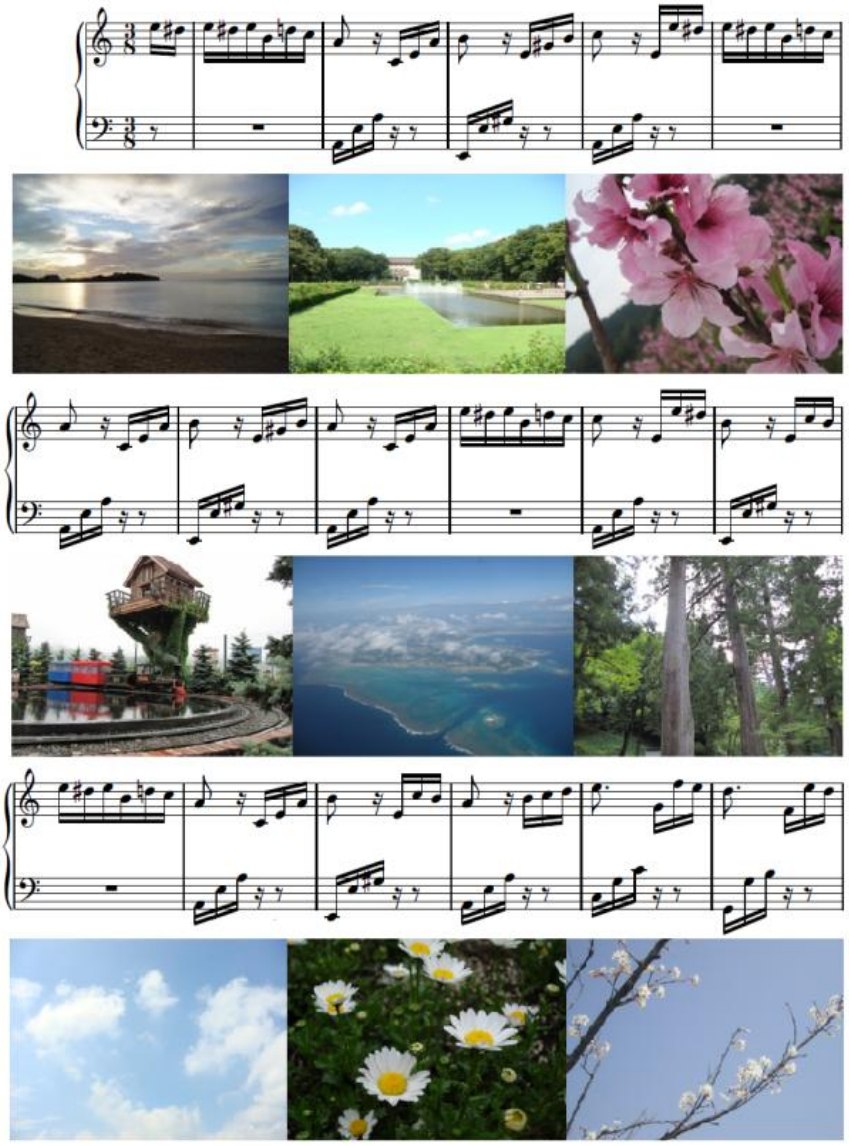

図 3　画像表示のイメージ

独習者は，提示された複数の画像から，投稿者のプロフィールやタグ情報等をもとに，不適切または気にいらない画像をクリックして削除することにより，必要な画像のみを残す．なお，図 4 に示すように，投稿者のプロフィールは，マウスカーソルを画像の上に移動すれば表示できる．画像の選定が完了したら，「閲覧ボタン」を押すことで練習モードに移行する．練習モードでは，ダブルクリックで画面が自動的にスクロールして，画像と楽譜の同時提示を行う．

4.　評価実験

楽曲の内容や作曲された時代背景などを表現できる画像を楽譜に付加して提示した場合に，初心の演奏者による演奏表情構築がどのように変化するかを調査するために，被験者による評価実験を実施した．実験で使用した課題曲は，ベートーベン作曲の「エリーゼのために」とした．実験に先立ち，「エリーゼのため

図 4　投稿者のプロフィールの表示

に」の楽譜を用いて画像収集のためのウェブサイトを立ち上げ，広く画像収集を行った．この結果集まった画像の数は 143 であった．

4.1　実験

画像を楽譜に付加して提示した場合と楽譜のみを提示した場合とを評価・比較する実験を行った．ピアノ初心者 3 名を被験者とし，課題曲であるベートーベンの「エリーゼのために」を，一週にわたり 1 回 30 分程度，5 回練習してもらった．

初めの 1 回は，通し演奏ができるかどうかを確認するための練習としたので，演奏を録音しなかった．次の 2 回は画像なし楽譜を使い，最後の 2 回は画像つきの楽譜を使った．これら 4 回の練習では，毎回通し演奏を 5 つ録音し，その中からベスト演奏を被験者に選んでもらった．ただし，楽譜に反復記号がある場合は，前の画面に戻る必要があるので，本実験では，反復記号を無視し，リピートなしで練習するようにした．なお，すべての被験者について画像なし楽譜での実験を先に実施し，画像付き楽譜での実験を後で実施した理由は，もしも画像付き楽譜を先に用いた場合，その影響が後の画像なし楽譜実験にも影響するため，両者の差異を見いだせなくなると考えたためである．

実験後，画像なしの楽譜を使った場合のベスト演奏と，画像付きの楽譜を使った場合のベスト演奏をピアノ指導暦 23 年のピアノ指導者に比較・分析していただいた．最後に，画像付きの楽譜を使った後の感想，楽譜に付加された画像が楽曲解釈に役に立ったかどうか，提示された画像が楽曲に合っていたかどうかなどについて，被験者全員を対象としたアンケートを行った．

4.2　結果と考察

被験者が自ら選んだベスト演奏をピアノ指導者に分析・採点していただいた結果を図 5 と図 6 に示す．図中，縦軸は採点結果に対応し，数値の単位は点である．採点については，演奏表情と熟練度の変化のそれぞれについて分けて行っていただいた．

演奏表情の変化に関する採点の結果より，被験者全員，2 回目と 3 回目の演奏が演奏表情の変化が少なく，この曲にある流暢な感覚を表現できなかったため，得点が高くないと見られた．一方，4 回目と 5 回目の演奏については，3 回目以前より演奏表情の変化が全て正確とは言えないが多くなり，演奏表情が豊かになったことをピアノ指導者が指摘した．

今回の実験では，すべての被験者について，画像付きの楽譜での練習実験を，画像なしの楽譜での実験の

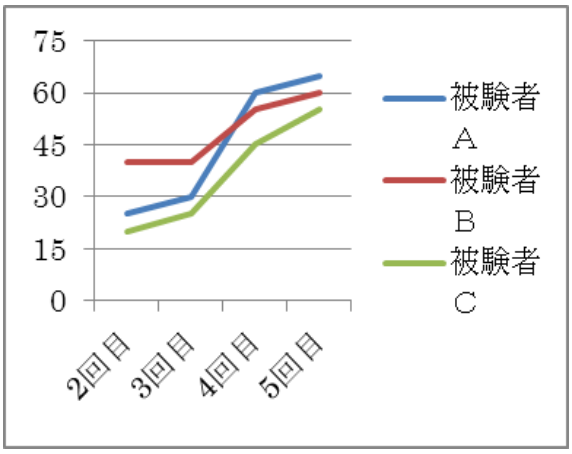

図 5　被験者の各演奏の得点（演奏表情の変化）

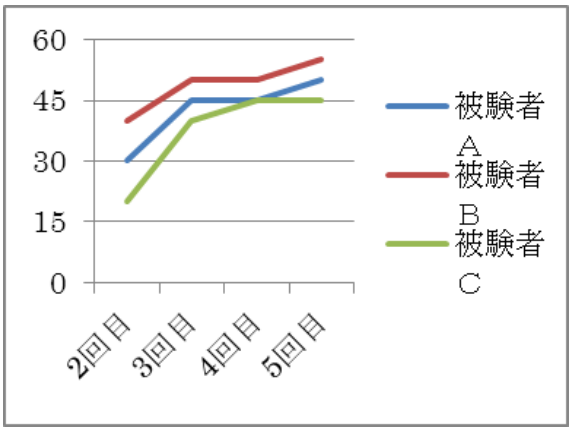

図 6　被験者の各演奏の得点（熟練度）

最後に行った．このため，画像付きの楽譜での実験時には画像なし楽譜での実験時よりも練習量が増えており，このことが演奏表情の向上に影響している可能性も考えられる．そこで，演奏表情とは直接には関係しない，音の正誤を中心とした技術的熟練度についてもピアノ指導者に評価していただいた（図 6）．初学の独習者にとっては，練習量の増加が最も影響を与えやすいのが熟練度である．その結果，すべての被験者について，特に 3 回目から 5 回目の練習にかけて熟練度がほとんど変化しなかった．このことは，今回の実験における練習量の増加程度では，演奏を大きく変化させる効果は低いことを示唆している．ゆえに，演奏表情に関する得点が 3 回目から 4 回目にかけて大きく増加した要因は，練習量増加の影響よりも，画像を提示したことの影響の方が大きいということを結論できるであろう．

アンケート調査の結果より，被験者全員，楽譜のみの場合より画像を楽譜に付加して提示した場合のほうが，楽曲内容や時代背景の情報を取得しやすく，楽曲

に対する理解度も高まったと感じていた．また，楽曲の各部分をどの感情で弾くかについて，画像にある情報から自分で判断できるようになったと被験者が考えていることがわかった．

以上の評価実験の結果より，画像を楽譜に付加して提示した場合では，楽曲に対する理解度が高まり，演奏表情が豊かになったと見られ，演奏者の演奏表情の構築によい影響に与える可能性が示唆された．

5. まとめと今後の課題

本研究では，画像を楽譜に付加して提示した場合と楽譜のみを提示した場合とを比較することで，初心の演奏者による演奏表情構築に及ぼす影響について検討した．画像データ収集の段階で，143 枚の有効画像を収集した。実験において，楽曲と画像の組み合わせることで，楽譜のみを見て演奏するよりも，関連する画像を楽譜とあわせて見ながら演奏することによって，楽曲に対するより深い理解ができ，豊かな演奏表情を実現することが明らかになった．

今回の実験では，画面スクロールを一定速度で行ったため，画像を付与された楽譜を提示することが，反復記号があるときや演奏スピードの変化などに対して上手く対応できないという問題があった．初心者の演奏に対応したスコアトラッキングの技術[6]を応用することにより，演奏者の演奏に合わせて譜めくりし，演奏者の演奏位置に合わせて画像を自動提示する機能を追加実現したい．また，今回は画像データベース構築に関する集合的な手法の効果に関しては検証できなかった．今後はこの効果についての検証も行いたい．

謝辞　本研究は北陸先端科学技術大学院大学ライフスタイルデザイン研究センターの支援を受けて実施された．特に示唆に富むコメントをいただいた金井秀明准教授に感謝する．

参　考　文　献

1) 竹内アンナ: ピアノ演奏の基礎(2):楽譜の解釈と表現,千葉敬愛短期大学紀要 21, 87-93, 1999-02
2) 坂本暁美: 演奏表現活動における「音楽の生成」の様相－教員養成課程でのアンサンブル活動における「音の重なり」の学習過程の分析を通して－,日本学校音楽教育研究会紀要, 2005
3) 田畑八郎: 音楽表現の教育学―音で思考する音楽科教育,ケイ・エム・ピー,第 2 版 2004
4) 石先広海,帆足啓一郎,小野智弘: 歌詞情報に基づく WEB 画像検索を利用した楽曲連動スライドショー生成システム,情報処理学会研究報告. Vol.2011 AVM 73 No.9
5) 岩宮眞一郎: オーディオ・ヴィジュアル・メディアによる音楽聴取行動における視覚と聴覚の相互作用, 日本音響学会誌, 48 巻, pp146-153 1992
6) 大島千佳，西本一志，鈴木雅実: 家庭における子どもの練習意欲を高めるピアノ連弾支援システムの提案，情報処理学会論文誌， Vol.46, No.1, pp.157-171, 2005.